

育児語の全国分布

—「神仏」と「座る」を対象に—

椎 名 渉 子

1. 目的

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」（2010～2015年）の調査項目である「神仏」・「座る」の語形を地図化し、その分布を考察するものである⁽¹⁾。この2つの調査項目は、孫や子どもに対する大人の言い方を尋ねるものであり、子どもに用いられる専用形式の出現を想定して設けられた項目である。この専用形式には方言が成立しており、それらは「育児語」「幼児語」と呼ばれ、これまで全国を対象に指摘されてきた（友定1997、鏡味2006など）。本稿においては、それらを育児語と呼ぶこととする。

しかし、こうした先行研究における育児語の全国分布地図は存在するものの、方言辞典などの文献をもとに作成したものや（友定1997ほか）、一部地域内の調査結果を地図上にあらわしたもの（鏡味2006など）であり、共時的視点から語形の分布を概観できる全国地図はこれまでなかったといってよい。そうした背景も含め、上記のプロジェクトにおいて、育児語が調査項目として採用された点、この育児語の全国調査の結果を地図化するという点に意義があると考ええる。

本稿ではこうした育児語のうち、生活の中での重要性が減ったもの（神・仏）と重要性が減じていないもの（座る動作）について、概念・形式両方の残存パターンを比較しながら、育児語の地域差を捉えるうえで必要な切り口を提示することを目的としたい。本来、育児語の地域差を言語地理学的に捉える際には、分布を形成する経緯を論じる必要があるが、出自も語形も一般語彙より複雑なものも多い育児語の実態を捉えるためには、いくつかの切り口を設けて語形の分類を行ったうえで地図に載せると育児語の実態がわかりやすくなると考えた。

したがって、本稿では、「神仏」と「座る」の育児語を対象とし、育児語の

特質を考慮しながら、単純に語を分類するだけでは見えてこなかった地域差について指摘したい。具体的には、育児語に特徴的な接辞の種類や語構成のタイプに沿って分布を観察するという切り口を設けることにより、新たな側面が見えてくることを示す。

その際、育児語の地域差を捉えるための観点として〔1〕～〔3〕を以下に示す。

〔1〕 育児語か、成人語か

育児語という専用表現を使用するか、それとも一般の語（本稿では成人語と呼ぶ）を使用するのかという観点から分布を観察する。

〔2〕 概念か、形式か

育児語の残存パターンとして、その概念を保持するのか、それとも語の形式を保持するのかという観点から分布を観察する。

〔3〕 語構成パターン

育児語特有の語構成のパターンという観点から分布を観察する。

2. 育児語の定義

友定（2005）では育児語を「マンマン」や「ワンワン」などの語と定義するが、それは幼児自身が話す言葉とは区別している。さらに、「育児語の語群は、（中略）一つの社会の認識構造・生活の枠組みをみせてくれるものであると考えられ、まさに生活語彙そのもののなのである（p. 7）」と位置付けている。

本稿においても、以上の友定（2005）の定義に倣い、子どもに向けられた専用形式を育児語と呼び、それ以外の一般名詞・動詞を成人語と呼ぶ。「神仏」「座る」の調査項目において、成人語が出現するのか育児語が出現するのかについても目を向ける。

3. 調査概要

国立国語研究所で2010～2014年に行われた全国方言調査（代表：大西拓一郎，国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」，以下FPJDとする）における調査（面接調査）結果を地図化した。調

査地点数は全国554地点である。被調査者の生年は1915～1962年となり、性別は原則的に男性に統一している。

以上の2項目の調査文は以下の通りである。

- ・「神仏」の育児語：孫など幼い子どもに対して、神様や仏様のことを言う場合、
何と言いますか。例えば、「神様に水をあげろ」「仏様に
手を合わせろ」などという場合です。
- ・「座る」の育児語：孫など幼い子供に対して、椅子やベンチに腰掛けるよう
に言う場合、何と言いますか。

また、本稿において調査で得られた回答語形についてはカタカナ表記で示す。

4. 「神仏」の全国分布

まずは、「神仏」を意味する育児語形をみていく。図1には「神仏」の育児語の全国地図を示した。得られた育児語形を概観すると、仏の称名（南無阿弥陀仏）を由来とするナムナム類、ノノ類、ニョニョ類、マンマン類⁽²⁾の出現数が多く、「あな尊し」が語源とされるトト類やガンガン類、コージン類も見られた。成人語には、神類・仏類のほかにセンゾなどの先祖類、カミダナなどの神棚類が見られた。大まかに言って友定（1997）と同傾向にあるといっていだろう。

4章では神と仏の総称としての育児語を、拝むべき対象を一括する意味が保持されているかという点と、語形の変化という点から捉える。

4.1 分布の概観（分析の観点〔1〕）

図1において、神と仏を区別する場合は、それぞれを併用語形として並べて示してある⁽³⁾。また、神と仏を区別せず、育児語形を複数有する場合も併用として並べた。

さて、まずは分析の観点〔1〕にあるように、図1を「成人語か／育児語か」という観点からみてみよう。東日本のなかでも青森・秋田・山形・宮城・奄美諸島を含む琉球方言域ではとくに育児語を使用する地点が少ないことがわかる。「神と仏の総称」としての育児語を収集した友定（1997）と比較すると、宮城

県にみられたトト類や秋田県のナムナム類・ニヨニヨ類などは見られなかった。一方、福島・新潟以南には育児語形がまとまって見受けられた。

次に、育児語形の観点からその分布に目を向けてみる。福島と宮崎・鹿児島にみられるニヨニヨ類、茨城・栃木・群馬の関東から長野・岐阜と岡山・兵庫にみられるノノ類、近畿と九州にみられるマンマン類、能登半島と宮崎・鹿児島にみられるナムナム類といったように周囲分布的様相を呈していることが分かる。以上のことをまとめると、下のようになる。

九州地方	中国地方	近畿地方	関東地方	北陸地方	東北地方
ニヨニヨ類	ノノ類	マンマン類	ノノ類	ナムナム類	ニヨニヨ類
マンマン類					
ナムナム類					

これまで「神仏」については、鏡味（2006）が周囲分布的様相を呈していることを指摘し、大きくはノノ類とマンマン類とに分けられ、古形のノノ類は岡山県周辺に保守的に維持されているが新しいマンマン類が近畿から九州へ勢力を南に伸ばしていったと解釈している（p. 25）。FPJDの結果からもそうした様相が見受けられる。つまり、「神仏」の育児語形自体の分布様相においては鏡味（2006）で指摘された周囲分布が大きく変化しているとはいえない。

4.2 育児語の意味変化（分析の観点〔2〕）

しかし、だからといって育児語がそのまま保持されているというわけでもなさそうである。今回の調査票において、育児語形の記載には「神の意味のみ」「仏の意味のみ」といった注記が見られ、育児語形を保持しながらも本来の意味であるとされる「神仏の総称」ではない回答もあった。たとえば、神様はカミサマと言い、仏様についてのみ育児語形のノノサマを使用する地域もあるということである。

これらは、もとは神仏の総称を意味したが途中でどちらか一方を指す語となり意味が変化した可能性があると考えられる。つまり、育児語形が「神仏の総称」を持っていたことを前提とすると、伝播の際のどこかの段階で神か仏かどうかにかに偏ったのではないかと考えられる。

そこで、調査票の注記に従って、育児語形のみを対象として「神のみを意味

する語」と「仏のみを意味する語」に焦点を当てて地図化した(図2)。図2では、地図記号の大きいものが神のみを意味する地点で、地図記号の小さいものが仏のみを意味する。

図2をみると、神のみを意味する語よりも仏のみを意味する語が多く、前者が東日本に、後者は北陸・中国・九州に目立った。なかでもノノ類・ニョニョ類・マンマン類は神のみの意味にも、仏のみの意味にも出現している。友定(1997)では、ノノ類は仏への称名(南無阿弥陀仏)に由来し、ナムナム>ナンナン>ノーノーという流れがあることを示している。

また、鏡味(2006)ではマンマン類は明治に入ってから大阪を中心に広がった語で、南無阿弥陀仏の聞こえ方が由来であることを示しており、どちらも仏が由来であると説くものが多い。現に、北陸・中国・九州では「仏のみを意味する語」としてノノ類、ナムナム類、マンマン類が広く用いられている。ところが主に東日本ではごく少数ではあるが「神のみを意味する語」においてノノ類・ニョニョ類が用いられている地域もある。

この図2から、育児語の残存のパターンとして二つの点が想定できよう。一つは、どちらか一方の意味しか持たない育児語はもともと神仏どちらか一方の意味しか有しておらず、そのまま保持されているパターンである。もう一つは、「神仏を表す総称」としての育児語がやがてどちらか一方の意味に特化され、もう一方は含まれなくなったというように意味変化をして残存するパターンである。

後者のパターンの場合、神と仏どちらを育児語形に充てるかという点にも地域差が生じるかもしれない。拝むべき対象(範囲)の縮小化、拝む行為自体の減少が背景となり「神仏の総称」の育児語の需要が減じているとみることもできるが、本稿における結果からは「神仏の総称」という概念自体は衰退しつつあるとしても、時代に即した意味に転じながら育児語形自体は残存しているというケースもあることが示唆できるだろう。図2の神のみを意味する語形の分布をみても分かるように、どちらか一方の意味しか示さない地域には近畿には少ない。したがって、この地域では「神仏の総称」という意味は保持していると考えることができる。

このように、どちらか育児語形が神仏のどちらか一方しか表さない地域の地域差を明らかにすることはできたが、これをどう捉えていくかについては、さ

らなる考察が必要となる。この点については、対象地域と宗派との関連などを含め、意味範囲をもう少し詳細に調べていく必要があろう。

4.3 育児語形の変化（分析の観点〔2〕,〔3〕）

育児語形の残存パターンの一つとして、前節において育児語の意味変化の可能性を挙げた。本節では、語形の変化について述べたい。

「神仏」に限らず名詞を意味する育児語形にはサマやサンなどの敬称が付加されることが多い。その機能として友定（2005）では待遇的意味を挙げ、尊重の意をもつサマ、親愛の意をもつチャンなどが多用されることを指摘する。なかでも親愛を意味する接辞が育児語では特に多い。「神仏」においてもサマ、サン、チャン、ハンといった敬称付加型が多い傾向にある。そこで、育児語形のみを取り上げ、その敬称部分を地図に示した（図3）。

分布をみると、東日本にはサマ、サンが、西日本にはサン、チャン、ハンが目立つ。図1には関東や長野・岐阜の東日本側と兵庫・岡山などの西日本側にノノ類がみられたが、同じノノ類であっても東日本のノノ類はサマを用いているのに対し、西日本ではサン、チャンが付加されている形もある。

こうしたチャンの多用は、単に新しい形を用いているというだけではなく、神仏を畏れるべき対象から親愛の対象として捉えた表れともいえるのではないか。西日本のノノ類は、そうしたチャンがマンマン類よりも古いとされるノノ類にも多く付加されることから、西日本では接辞を変化させながら育児語自体を保持してきたといえる。一方、東日本ではノノサマやニョニョサマのように尊重の意味の接辞を保持したまま残存し、語形の変化はあまりみられない。

以上のことから、育児語形自体は周囲分布の様相を呈しながらも、育児語の一部分を切り取ると、東西差が窺えたといえるだろう。また、伝統的な育児語形に現代的な形式を取り入れながら育児語を保持している西日本の特徴が浮かび上がったといえるだろう。この結果はどのように保持されてきたかという残存のパターンの東西差であるとみることができる。

図1 「神仏」の育児語



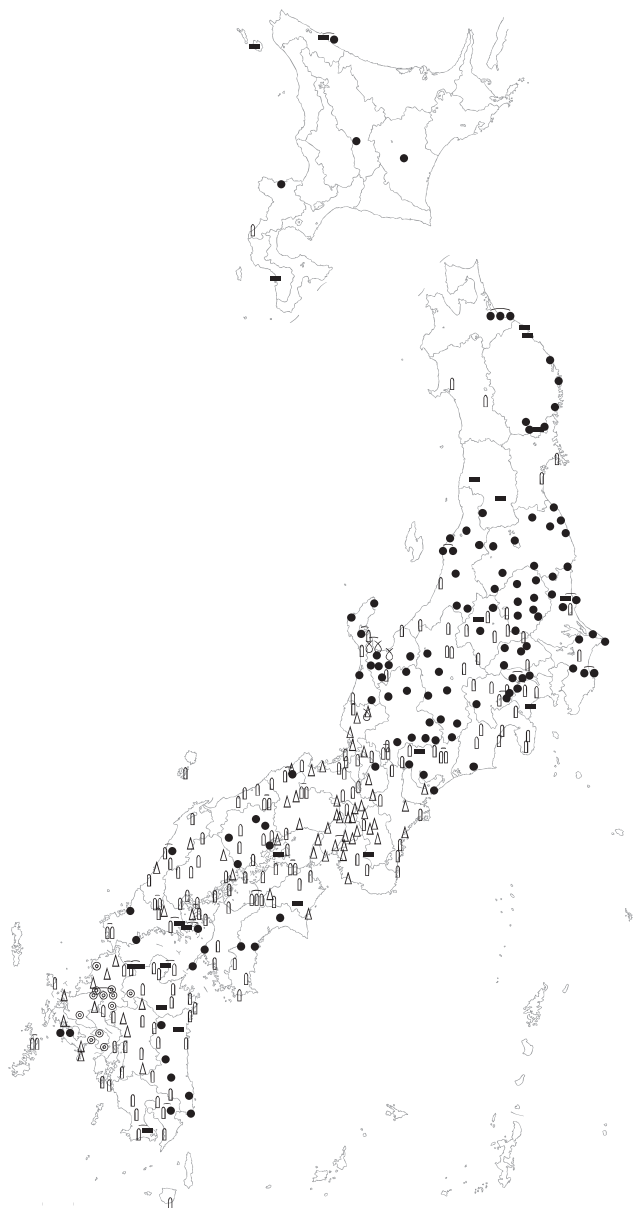
図2 神のみを意味する語／
仏のみを意味する語

大きい記号：神のみを意味する
小さい記号：仏のみを意味する
※凡例は図1と同じ



図3 「神仏」に付加する接辞

- 接辞なし
- ーサマ
- ▮ ーサン
- ◎ ーシャン
- × ーハン
- △ ーチャン



5. 「座る」の全国分布

本章では「座る」の項目に出現した育児語形についてみていくこととする。

「座る」の育児語の全国地図は図4に示した。実に多様な語形が存在していることがわかる。「座る」の育児語の多様性については、友定（1997）において「座るという動作は発達上の大きな節目となる動作でもあり、また動きまわる幼児を静かに座らせるという難しさが、このように多様な語をうみだす（p. 222）」という指摘がある。そうした結果がFPJDにもよくあらわれているといえるだろう。

育児語形の分類については、友定（1997）の設定した類を参考にして分類した。

5章では、語形の分布を概観するとともに、育児語の語構成のタイプ別に地図化することによって、反復形をとるのは九州や沿岸部に、非反復形は座るという動作に目を向けた形式が近畿周辺に見られたことを述べる。

5.1 分布の概観（分析の観点〔1〕,〔3〕）

まず、分析の観点〔1〕に掲げた「成人語か／育児語か」についてみてみよう。「神仏」の育児語と同様に、東北や北陸、琉球方言域では育児語形の出現は少ない。友定（1997）では青森・岩手・秋田にはオチャンコ・ジャンコなどが挙げられていたが、そうした育児語形はFPJDに見られず、スウル、ネマルなどの成人語が用いられている。本稿では「神仏」「座る」の2語のみを取り上げたが、2語とも東北での使用が少ないという点について考えると、育児語という言語の運用面の地域的特徴が反映されているのかもしれない。

しかし、その一方で、北海道と関東以南には様々な育児語形が出現していることが分かる。ただし、友定（1997）で指摘されている語形のバリエーションほど多くの語は出現しなかった。

次に、育児語形のバリエーションに目を向けたい。まず、成人語形か育児語形かという点でみると東北や琉球方言域では育児語形の出現は比較的少ないことは先に述べた。青森・岩手・秋田にはスウル・ネマルなどの成人語形が用いられている。その一方で、北海道と関東以南には様々な育児語形が出現していることが分かる。

さらに、育児語という特徴を考え含めると、育児語特有の語構成という観点から類を分けたほうが分布の地域差が見えやすいのではないかと考えた。育児語形の形式的特徴については、友定（2005）では、以下の4点を挙げている。

- 〔1〕反復形（ワンワンなど）
- 〔2〕接辞付加（チャンコ・エンコなど）
- 〔3〕成人語／育児語＋スル（キレイキレイスル・トンスルなど）
- 〔4〕オノマトベ＋スル（ゴクゴクスルなど）

以上の点を踏まえて「座る」の育児語形についてみると、友定（2005）の掲げた特徴を多く含んでいた。まず、〔1〕についてはチャンチャン、キンキンといった反復形が見られた。〔2〕については、チャンコなどの接辞コや、チョンド、チント、キントなどの接辞トが見られた。また、〔3〕についてオスワリスルとオヒザスルの2語が見られた。〔4〕については、トンスル、トッチンなどがみられたが、これは座るようすを表した擬音語・擬態語だと考えられる面もあるものの、確定することはできない。

このことから、「座る」の育児語を分類する際、「育児語／成人語」、「反復形」、「接辞付加」、「成人語＋スル」の特徴に沿って分け、育児語生産・運用の面においてどのような地域差が見出されるのかについて分布をみていきたい。

図4をみると、まず、接辞コ・トが付加する類としてチャンコ、ジャンコが全般的に目立っていることがわかる。なかでも、南東北～関東ではエンコやエントといった「エン＋接辞」タイプが見られた。接辞のみに焦点を当てると、接辞コが東北から九州まで広い範囲で出現しているのに対し、接辞コが南東北と関東の一部に集中していることが分かる。

また、接辞ではなくチョン、チン、トンなどといった撥音で終止する形式をみると、オッチンやトンなどの撥音で終止する類は近畿に集中している。これらの分布からは、東北から九州にかけて接辞コ・ト類が広く分布するのに対し、近畿において撥音終止類が集中的に現れるという周囲の様相を呈しているとみることができ、撥音終止類は新しい形式と捉えられよう。さらに、反復形については、チャンチャン、チンチンなどの反復形が北陸・東海・中国・九州に散見される。

加えて、福島県以西にはオスワリスルなどの「オ＋成人語＋スル」という形

式が見られる。このような構成の語は関東や近畿を中心に勢力を伸ばしていると推測できる。

以上をまとめると、次のような分布になる。東北・関東・北陸を除いて、チャンコ類が多く見受けられ、とくに北海道・東海・中国・九州にチャンコ類が目立つ。関東にはエンコスル、エントスルなどのエント・エンコ類が目立ち、オッチン・オッチョン類などは近畿に多いことが分かる。また、四国や山陰ではトン類も見られる。

5.2 育児語の語構成の特徴と地域差（分析の観点〔3〕）

育児語の性質を捉える際に、動詞であれば～ン、～コ、～ボなどの接辞の機能や、反復といった形態面を無視できないことは前節でも十分に述べてきたとおりである。4章に取り上げた「神仏」の育児語には待遇的意味を表すサマやチャンなどの敬称が接辞として用いられていた。動詞の場合には動詞の性格によって接辞が使い分けられ、「座る」の育児語の接辞には主に～ンと～コが多いという（友定2005, p. 87）。

図4ではそうしたことを踏まえて語形全体を掲げるかたちで地図化した。ここからさらに育児語の語構成の側面だけを切り取って地図化することで、育児語の運用面において見えてくる傾向があるのではないだろうか。語形全体ではなく、育児語の語構成に特徴的な部分のみを取り出し、図5に示した。

まず、図5の凡例を「反復形」「不完全反復形」「非反復形」に大別した。さらに、「非反復形」を接辞「～コ」「～ト」「～ン（撥音）」、「長音」を含むもの、「オスワリスル」などの「オ+成人語+スル」、「スワレ」などの「一般動詞」に分類した。このように、切り取る範囲を絞り込むことによって、育児語としての特徴がより見えやすくなったうえで地域差をみていきたい。

図4 「座る」の育児語

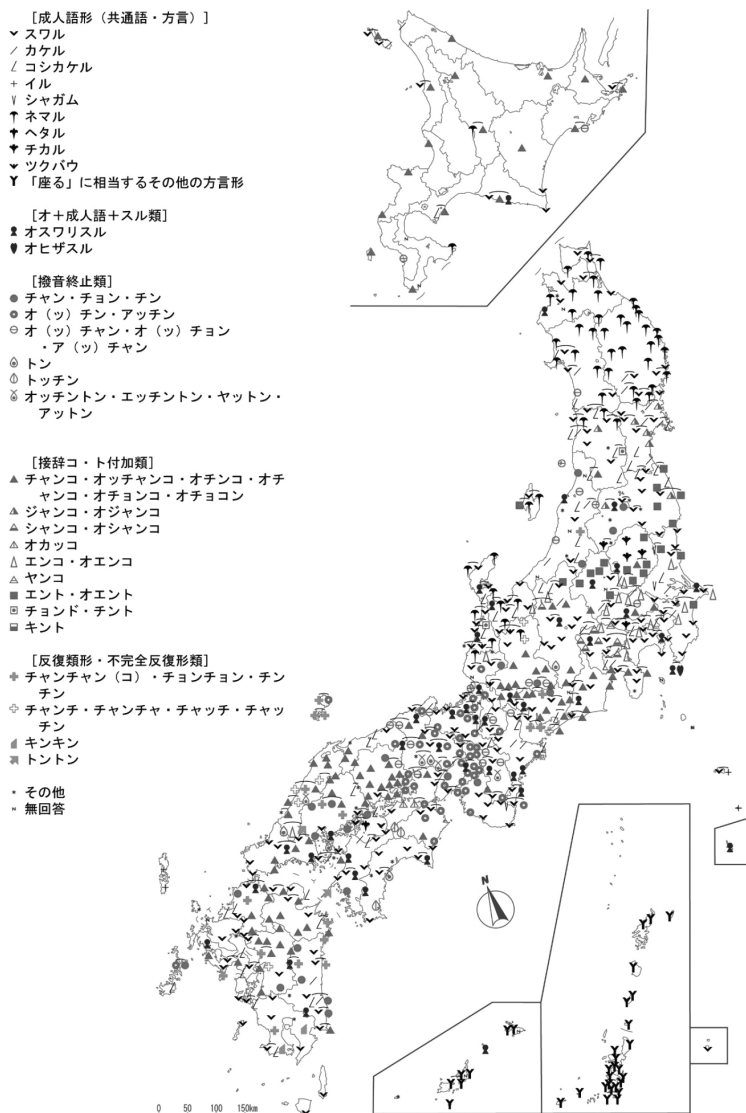
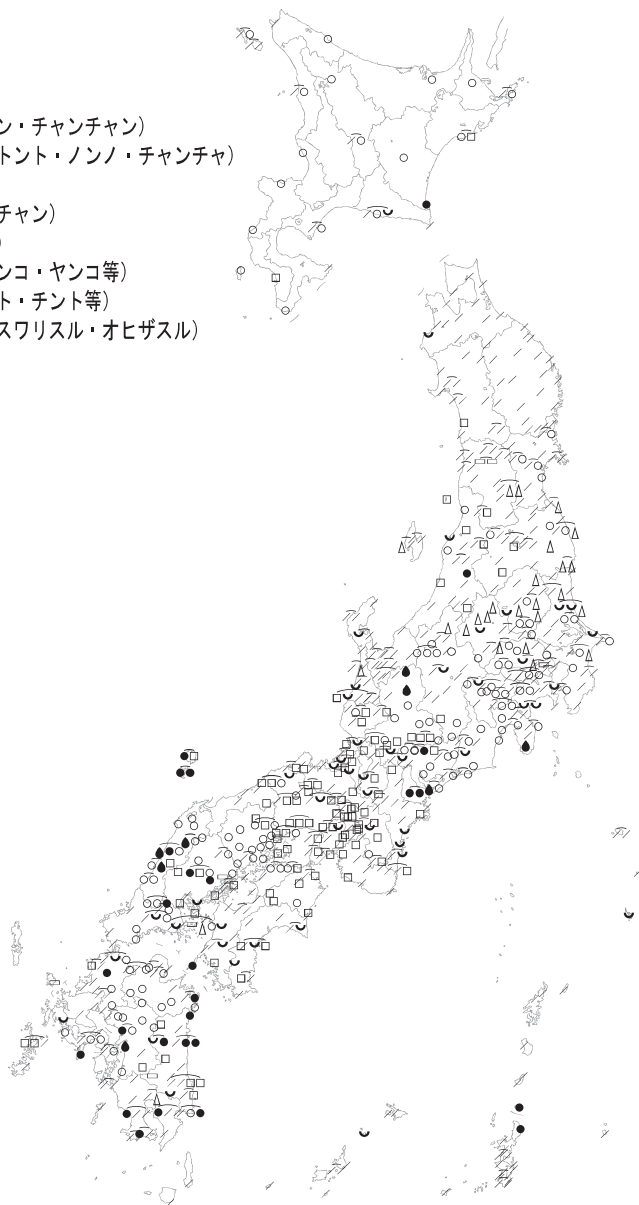


図5 「座る」の育児語の語構成

- 反復形（キンキン・チャンチャン）
- 不完全反復形（トント・ノンノ・チャンチャ）
- 非反復形
 - 撥音（トン・チャン）
 - 長音（ジャー）
 - 接辞コ（チャンコ・ヤンコ等）
 - △ 接辞ト（エント・チント等）
 - ∪ オ〜スル（オスワリスル・オヒザスル）
 - ／ 一般動詞



さて、図5をみると、反復形は東海・山陰・九州の沿岸に見られ、不完全反復形や北陸や中国地方沿岸に分布していることが分かる。反復形は基本的には「飲む」などの反復を伴う動詞の育児語（ゴクゴクスル等）に用いられるが、友定（2005）では、反復する動作をする動詞以外で反復形が用いられているのは「座る」だけだと述べている。早川（1981）のいうように育児語に見られる反復形は幼児の言語習得における音声認知、音声操作の獲得を容易にする工夫である⁽⁴⁾ことを踏まえると、こうした地域では音声的側面に重点を置いた傾向があるといえるのではないだろうか。

また、接辞コと撥音が広く分布していることがわかる。非反復形のなかでも、接辞コが「チャンコスル」などを中心に広く分布しているなかで、トンスルのトンやチャンスルのチャンに含まれる撥音が近畿を中心とした地域に特徴的であることは前節においても述べた。このようなチャン（スル）、チン（スル）、オッチン（スル）などの撥音は、接辞コの持つ安定感よりも、座るという動作の1回性・瞬間性、動作の完了をイメージさせる。こうした意味的側面を当該地域においては重視していたとも考えられるだろう。

加えて、この撥音が大阪を中心とした近畿でみられる点については、語の使用場面・使用状況なども関わっているとも考えられる。調査票の回答には、近畿にみられるオッチンスル・オチンスルはとくに大阪で正座を意味する語であると補足説明されているものもあった。子どもに対して座る動作を命じる際に、改まった座り方ともいえる正座がよく使用されやすいといった状況から、正座を意味するオチンスルが回答されやすかったり、影響を及ぼしやすかったのではないだろうか。

さらに、こうした撥音は他の動作動詞の育児語にも多く用いられ、汎用性が高い（友定2005, p. 86）。汎用性の高い比較的新しいタイプが近畿に見られるということは、近畿では今後も育児語は勢力を弱めずに保持されていくことが予測される。

加えて、もう一つの勢力として「オ+成人語+スル」がある。成人語としてのスワルを名詞化し、～スルを付加した形である。これが関東と近畿、四国・九州に見られるが、とくに関東・近畿に多く見受けられる。「(オ+) 成人語+スル」が成人語から転成した語であることと、「オネンネスル（寝る）」「オッ

キスル（起きる）」などのように汎用性が高いことから、この語構成の育児語は「座る」に限らず、今後、勢力を維持していくのではないだろうか。

6. 2つの育児語の分布図からみえてきたこと

生活の中で重要性が減った「神仏」については、育児語形の意味を変化させながらも育児語形が残存するパターンが存在する可能性を示した。また、育児語の特徴である接辞のバリエーションに着目した分布からは、語形変化し残存するパターンがあることがみえてきた。そして、日常生活において重要性が高い「座る」の育児語においては、育児語に特徴的な語構成のタイプから地域差をみることにより、どのようなタイプの育児語が新しく、勢いがあるのかを示した。地域と残存パターンについて大まかに整理すると以下ようになる。

東北	：育児語使用が少ない。
東日本	：育児語形は古形を保持する。概念は変化する。
北陸・中国・九州	：概念・育児語形共に変化する。反復形を用いる。
西日本（とくに近畿）	：概念は保持する。育児語形は汎用性の高い形式に変化する。

これら2つの育児語の分布から、西日本のなかでも近畿は概念を保持し、新しい形式や汎用性の高い形式に変化させていることから、他地域と比較して育児語が活発であるという結論をつけられよう。

本稿では、語形自体の分類だけでなく、語の意味や接辞の形式、語構成といった切り口を設けて語の分布をみることで新たに見えてくる点もあることを指摘した。

切り口を設けて見えてきた地域差をどのように捉えて分析していくべきなのかが今後の課題となるだろう。このような結果は、場面に応じて表現を言い分けるか否かという点からみた敬語や言語行動などの表現法レベルの地域差と関係があるのかもしれない。

注

- (1) 「方言の形成過程解明のための全国方言調査」に関する概要は以下のURLに示されている。
国立国語研究所HP (<https://www.ninjalac.jp/research/project/a/hougenbunpu/>)
また、本稿は「JLVC2015国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会(2015/3/7)」において「育児語の全国分布—全国方言分布調査より—」と題した発表内容を論文にまとめたものである。
- (2) マンマンの語源については、南無阿弥陀仏と唱える音がマンマンに聞こえるという『上方語源辞典』の説と、鏡味(1974)によると「参る」の語を重ねたものだとする見方など諸説ある。
- (3) 地図の凡例は、記号の横のカタカナ表記が回答語形である。言語地図作成にあたっては国立国語研究所による言語地図作成用プログラム(プラグイン)を利用した。
- (4) 育児語における反復形の機能について、友定(2005)では幼児の生理的発達段階、発音のしやすさ、幼児の興味喚起、認知のしやすさといった機能を挙げている。

参考文献

- 鏡味明克(1974)「幼児語の方言分布の考察(4)一付・名古屋地方の幼児語反復語形一」
『順正短期大学研究紀要』第4号
鏡味明克(2006)「幼児語の分布と伝播」『言語』35(9), 20頁-27頁
友定賢治編(1997)『全国幼児語辞典』東京堂出版
友定賢治(2005)『育児語彙の開く世界』和泉書院
早川勝広(1981)「育児語と言語獲得」『言語生活』351
前田勇編(1965)『上方語源辞典』東京堂出版